

アフガニスタン通信 (三)

カブールにて 池 本 泰 兒

二月二十一日は之れまで連続の野業で非常に疲れてゐたのと金曜日で當國の休日であるのを口實に野業を休んで圖面を書くことにしました。夜はカンテラの燈火ですから到底圖面は書けないのです。午前十一時頃公使館の齊藤さんが澤山の手紙と新聞と官報とを持って來て呉れました。齊藤さんの來られたのは私の測量中シーメンス會社の技師が來ることになつてゐたので、其の通譯のために態々來て下さつたのです。シーメンス會社の技師は午後三時頃來ました。彼は獨逸人の銀行に勤めてゐる人と美術學校の繪の先生と三人で來ました。繪の先生が途中で寫生をして居た

と見えて遅くなつた様です。私は自分の考へでやつてゐますから別に尋ねることもありませんでした。彼は何時頃出來上るかとも聞きませんでした。此の人達は夕方此處を出發しましたが、夫れでも紅茶やお菓子をお馳走してやりました。齊藤さんは自動車のガソリンの不足をおそれて夜の旅を避けることにして泊つて行きました。彼の一行は運轉手とボーイ一人とで三人です。物資の補給のつかないこの邊避な處へ來てゐて、もう砂糖も茶も燐寸もきれかゝつて居るのに斯うお客さんに來られると少し冷々するものです。都から日歸へりで來られる人は別にさう御馳走になることが迷惑

になるとは當然思つてゐないことでせうし、又私にした處で態々通譯のために自動車を派遣して下さつた公使館の配慮にはお禮の云ひ様もない程感謝して、管ですけれども現實の食糧問題に就ては實際冷々します。次の日齋藤さんは十ガロンのガソリンでカプールを出發して來るだけに道が判らなくて少し廻道をしたために六ガロン半を消費したと云ふのですから三ガロン半のガソリンで出發せられました。歸へりつきましたか知らと案じてゐます。若し途中でガソリンが無くなつたらカプールまで補給が出來ないので。さうすれば寒い曠野の道を峠を何里も歩かなければならないでせう。

此處で、こんな田舎で讀む日本からのお手紙はほんとうに嬉しいものであります。年賀状もありました。坂本福岡縣土木部長から、辛抱して働いて來いとも云つて頂きました。又福岡から臺灣までの郵便飛行も初まつた。今にお前の居る國までも延びるだらうとも云つて下さいました。實際早くそんな時期が來ればいゝと思つてゐます。此の辛抱

して働け夫れが御國のためだし君のためだといはれることは、又此の様なお手紙は何誰からも時々云つて頂くのです。が、そんな時には何時もさうだつた辛抱しなければならぬと思ひ返へすのであります。私は時にはもう我慢も辛抱も出來ない、もう何もかも要らない直ぐにも日本に歸へらうと云ふ考へが起ります。此の考へが丁度波の様に時には高くなり時には低く動揺してゐるのです。

此處へ來て暫くしてアスニヤルの連れて來たボーイの一人が憂鬱性の如きものにかゝつて笑つたり唄つたりするかと思へば永い間黙まつて誰が何と云つても判らない様になりました。其の後癒つても其の男は皆に氣狂だとかからかはれて笑ひ者になりましたけれど實際に氣の狂ひさうになるのは自分自身ぢやないかと他人事ならず考へた事です。

實際自分がこんな邊避な國に來て不自由だらけに、又何一つ思ひ通りにならない處に來て働いて居るのに日本では京都の土木部長から宮城の土木部長に轉任を命ぜられて夫れが左遷だと憤慨して辭職する様な贅澤な事もある様に聞

きました。が、今の私は日本のうちで働けるなら何處だつていゝ町村の技術員だつてかまわないと時には思ふことがあります。曠野を歩いて居たり測量してゐると淋しくなつて日本の唄をうたひます。唄つて見て初めて考へつゝいた事ですけれど、あんなに新興の意氣に燃ゆる又愉快に暮らせる日本だのに何んであんな哀調のある唄が多いのだらうと思つたことです。不思議に思はれます。私の知つてゐる唄はさう澤山ないのですけれども其のうちの大部分は哀調を持つてゐる唄です。例へば、

山は高いし野はただ廣し

獨りとぼとぼ旅路のながさ

乾く暇なく涙は落ちて

戀しきものは故郷の空よ

之れは全くアフガンに居る私の氣持と全くびつたりですから良く唄ひます。其の他「酒は涙かため息か」にしても「昔戀しい銀座の柳」にしても「俺は河原の枯薄」にしてもさうでせう。だから私は時には小學唱歌も唄ひます。軍

神廣瀬中佐などは何時唄つてもいゝですね。

轟く砲音飛び來る彈丸

荒波洗ふ甲板の上に

闇をつらぬく中佐の叫び

杉野は何處 杉野は何處

船内隈なく尋ねる三度

呼べど答へず探せど見えず

船は次第に波間に沈み

敵彈いよいよあたりにしげし

今はとポートに移れる中佐

飛び來る彈に忽ち失せて

旅順港外恨の深き

軍神廣瀬其の名残りて

日本の蓄音器のレコードも聞きたいものです。ペルシャ語やアフガン語のレコードでは全く何のことやら判らないのですし、又英語のでも佛蘭西語のでも判らないことは同じです。此の國で買へるレコードは英國の Hrd mastors-

Goce のものと印度で吹き込まれたものとです。夫れでも此の國に来るものは矢張り當國の趣味に合ふものですから、ちよつと私の趣味には會はないものがあります。一度館屋の笛みたやうなのを買つて来て驚いたのですが、夫れはトルコの音楽だつたんですね。此の國の人も矢張その様なのが好きな様です。

新聞は朝日と日々のお正月から三週間分が来たのでそれを片つばしから読みました。日本の新聞の活字は細過ぎますね。カンテラの燈では全く読み難いのです。眼が痛くなります。此の國で私は良く日本人はみんな眼鏡をかけるねと聞かれるのですが何時も返事に困つてゐます。實際現在カブルに居る男の日本人は七人居るのですが其のうち五人は眼鏡をかけて居るのです。驚いて土木協會の送別會の時に撮つて頂いた寫真を見たのですが、夫れでは五十人のうち眼鏡をかけてゐるのは十七人に過ぎません。だからさう澤山の人が眼鏡をかけてゐると思ひませんが夫れにしても三分の一以上になりますから日本人には眼鏡をかけた

人は確かに多い様ですね。之れは日本の文字の活字の字格が細いのに依るのでないかと思ひます。少くとも此處のカンテラの燈で讀むには細か過ぎます。然し日本の便りが來てはどうしても讀まずには居られません。軍縮會議の決裂と興味深く讀みました。決裂したとしても同じことですけれども、若しあの會議で日本の主張が通つた場合を考へれば、實際日本は偉くなつたものだと思ひます。私の様に伊太利人だの獨逸人と一緒に働いてゐる者は例へ軍備だけにしても、お前達の國は俺の國に及ばないぢやないかと云ふ様な氣がして非常に氣樂に付き合へる様になると云ふものです。

又議會解散の氣運のことも出てゐます。その記事のなかに、弱力内閣などと大きな活字で書いてありますが、あんなのを外國で讀むと妙な氣がします、讀み終つた新聞の寫眞を此の國の人達が見て之れは何だ之れは何だと一々聞くのですが、其の寫眞が妻殺しであつたり、自殺者であつたりして困りました。又古新聞を泥の荒壁に測量用の釘で打

ちつけて其の上に洋服などをかけることにしたのですが、古新聞の壁を見ると私は福島の子峠へ測量に行つた頃の宿舎を思ひ出して日本に居る様な氣のする事があります。

雨が降つたり雪の降つた様な日は尾籠な話ですが私は床に古新聞を敷いて夫れに大便をして助かりました。此の國の家にも便所はある様です。然しどうしたものか盛に野糞をします。家の周圍の裏あたりの畑は一面に野糞です。之れはカブールでも同じことで、堀のかけなどは殆んど足の踏場もない位です。雜踏する市場の傍をカブール川が流れてゐますが其の護岸の處など全く共同便所です。實は私も小用を其處で二度程した位です。ワルグークの私の宿つてゐる家にも便所もありますが其の一部屋を借りてゐるのでこの部屋には便所がないので當然畑にしなければなりません。夫れで来る早々畑の中に土の圈をつくつた便所をつくつて貰いました。小便でも大便でも原つぱに誰でもするのですが、他の人は之れを絶対に見やうとはしません。寧ろ意識して之れを見ない振りをします此の點はいゝ事だと思

ひます。私も測量中に二度程野糞をしましたが、此の木蔭の全くない國でかくれてする譯にも行かないのですが、其の場合には全く誰も見やうとしません。之れでは野糞の習慣のあることも腹の具合の悪い時などにはお蔭で助かつたと考へたことです。見られると云ふことですが、今は冬期で農閑期だからでせうが、私が測量してゐても晝食してゐても園りは黒山の様に大人も小供も寄つて来てじつと座つて見てゐるのです。今では慣れて平氣で食事もしてゐます。晝食は私のボーイが晝頃パンとゆで卵とを持って来て、其處でお茶を沸して食べます。人夫達は食べない様です。ほんとに残りをやらなければならぬのかも知れませんが、澤山の人夫にやるには残りの方が何倍も要りますから私は知らん様な顔をしてゐます。

ゆで卵と云へば、朝も晝も二つ三つは必ず食べます。日本に居た頃は卵を餘り好かないので殆んど食べなかつたのですが、今では甘味いと思つて食べます。他に食べるものがないのですから自然さうなるのでせう。今一つ此の國に來

て覺えたことは鶏や鴨を丸ごと煮たのを三日にあげず食べるので、鶏のむしり方です。何處の肉が一番甘味くて、何處にどんな骨があるかをもうすつかり覺えました。丁度日本に居て魚のむしり方、甘味しい肉のある處、骨の格好がどんなだかを誰でも知つてゐる様なものです。此の國では牛肉でも羊肉でもお料理に骨付きの儘やります。夫れが反へつていゝ御馳走になつてゐる様です。

三月三日から七日迄が此の國の最大の宗教祭日で役所もお休みです。此の國のお正月は三月二十一日なんです、が、年末年始は全くお休みなしで此の宗教祭日は丁度其の代りにもなるのでせう。働に出掛けて居る者も郷里に歸へり又一般人民は皆いゝ着物を着て愉快に遊んだりお参りに行つたりする様です。夫れで各家庭では其の前に晴着をこしらへたり御馳走をしたりするらしいです。

私と一緒に來たアスマイヤルは其のお祭の三日前にはどうしてもカブルへ歸へりたいから夫れまでに測量を濟ませずて呉れと云ひ出し、又其の頃に迎への自動車の來る様な手

はずもやつた様です。私も出來ることなら、さうしてやりたいと思ひ懸命に仕事を急いでは見ましたが何しろ、延長六籽半の水路と三籽半の水路との二本を測量し又附近の平面圖を造ることは私にはさう急には出來ません。

二月十二日に測量を開始して、十五日は霽で内業二十一日はシーメンスの技師が來るので内業二十二日は霽で内業で休み二十四日までの外業が十七日間になります。此の時には未だ中心線の路線測量が一日分残つて居り、夫れから附近の地形を測量する分が残つてゐました。

處で二十五日は朝から雪です。二十六日迄續いて雪でした。だから外業は出來なかつたのであります。二十七日には十纏程の積雪がありました、夫れでも雪は止んだので其の日にトランシツトの測量だけは濟ませました。一面眞白な雪の中で凍る様な思ひをしながらやつと宿へ着いたとです。處が其の晩迎への自動車が來ました。未だ地形測量が未完成なのに自動車が來てしまつて、然かも自動車の運転手と助手二人と今一人の役所の男が其の弟を連れて五

人増へたことになります。砂糖も茶も其の他の食料品も殆んどなくなりかかつた處へ五人も来て、其の人達に私が自分で食はしてやらなければならず然かも一部屋に今までの七人と加へて十二人の人が宿るのですから大變なことになつたものです。さうして其の夜から大雪になりました。次の日も降り出して五十糶の積雪になりました。

私は未だ地形測量が残つてゐますから、未だ當分居なければならぬけれども雪が降つてゐるので出られませんから圖面を書いて居たのですが、アスマイアルは用事はなし迎への自動車は来て居り、お祭りの前にはどうしても歸へたいと思つて居るのですから、もうじつとして居られなくなつた様です。私を置いて歸へることは自分の責任上出来ないと考へては居た様ですが、何としても落ちついて居られないと云ふ風でした。夫れで私の荷物を送らせるると云ふ理由で彼等を一足先に歸へすことに決めました。

二十九日は又朝から大雪です。夫れでも出發すると云ふので大雪の降る中を荷物を全部運んで、村人に私のことを

頼んで出發しました。私と私のボーイとだけが残つて居ました。然し五十糶もある雪道で然も先も見えない程降つてゐる中を自動車は無理です。自動車は一町程やつと動いて其處で横滑りをして吹溜りの雪の中に入り込んで動けなくなつたので歸へることを斷念して再び荷物を持つて歸へつて來ました。其の人達はこれだけに一日かゝつてゐました。アスマイアルも之れではちよつと歸へれなくなつたので、とうとう寢込んでしまひました。十二人も一部屋で不氣嫌に外へも出ることが出来ずに食料に不自由して座り込んで居ることは全く不愉快なものです。

三月一日は快晴でしたが積雪は五十糶からあります。吹き溜りは一米からあります。もう地形も何も判らないのですが、他に方法がないので私は中心線の入つた原圖を持つて其の地形を入れるために出かけました。中心線に沿ふた處は既に地形はとつてあつたのですが、其の兩翼部は之れからですから、こんな雪の中では見取圖を造るより、方法はあります。又積雪で膝まで入り込む雪の中では歩行さ

へ困難で又手も凍る程寒いのに小高い山にあがつてスケッチ式に書き入れました。一日で三分の一程済せました。二日も同じく出掛けましたが、午後から雪が降り出して歸へつて來ました之れで半分は済みました。こんなスケッチならあと半分はもう一日あれば済むと思ひましたが、こんなスケッチに依る平面圖を外國技師に見せるのは非常に心苦しいことだとは考へました。然し何せ五十纏の積雪上であつて見れば、此の雪の消へるのは何日後のことか見當のつかない日數を此處に滞在しなければなりません。然し出來るなら私はさうしやうと考へて居りました。

處が其の晩寢込んで居たアスマイヤルがお前の測量は何時濟むのか、夫れを何とか明日一杯に濟ませて呉れないかと云ひ出しました。私はアスマイヤルが自分の家庭のことばかり考へて歸へりたがるのに腹が立ちました。自分は毎日寢込んでばかり居て、私が此の寒いのにどんなにか早く切り上げたいと一生懸命働いてゐるのに何と云ふ云ひ方だらうと思ひました。私は俺はもつと居るからお前達で先に

歸へつて呉れと云つたのですが、こんどは外人のお前だけ置いて歸へることは危険だから夫れは出來ないし、又自分としても大臣に叱られるから出來ないと云ひます。夫れで私は明日カブルへ歸へらう。然し自分としてはこんな未完成なものを出せないから俺はもう日本へ歸へる様にすると全く喧嘩になつてしまつたお互に黙まつたまま寢ました。私は其の夜は殆んど寢られない程興奮してゐました。

翌朝三月三日に私は早く起きてすつかり出發の荷造りをしました。アスマイヤルは幾ら喧嘩の上とは云へ歸へるとなると元氣になつて病氣で起きられないと云つて居たのに起き上がつて、歸へる用意をしました。

歸へるに就て私は家主に二十日以上も世話になつたのでお禮にもと十圓夫れから只で使つた人夫達にお茶でも飲んで呉れと人夫頭に十圓とをやりました、ほんの志だからとやつたのですが、之れをアスマイヤルはお前は役所の用事で來たのだから遣らないで呉れと云ひ、私はほんの志だから

ら取つて貰つて呉れと云ひました。こんな簡単なことでも、夫れがペルシヤ語で氣持が通じ兼ねると、更に昨夜からの穩やかならぬ空氣があるので何か夫れが口論の様になりました。其の時私のボーイが、屋主と人夫頭に主人が志だと云つてゐるのだから其のお金を貰いなさいと云つたものです夫れをアスマイヤルがおこつて何だお前はボーイの分際で何を云ふんだと云つたものですからボーイも負けて居ず。一口論しました。

私のボーイは私の處へ来て皆と一緒に自動車で歸へるのはやめてシヤカバツトまで歩いて他の自動車で歸へりませうと云つたものです大きな荷物を持つて歩くなんて大變ですから、まあいゝあの自動車で歸へらう、お金はお前からやつといて呉れ、俺は自動車の来る迄残りの測量をして來るから、お前は荷物を自動車へ積んで呉れと私は圖面だけ持つて外へ出ました。午前八時でした。夫れから出來るだけでもやらうと急いで地形のスケッチを初めて午後一時頃まで済みました。自動車は九時頃出發なのだから直ぐ來

るつもりだつたのですが、一時になつても二時になつても來ないのでどうしたのかと引返へして見ましたら、自動車は五十糶程の雪道で大難航をやつて居ます。人夫二十三人出て來て雪を除けたり後から押ししたりしてゐます聞いて見るとカブルまで四、五時間の行程に要するガソリンを普通なら二十分で行ける様な處まで、もうガソリンも使ひ果たしたと云ふのです。自動車にガソリンを無くすれば、もうどうし様ありません。夫れで之れから自動車に荷物を入れて其の村に預け、歩いてカブルへ歸へることにしました。荷物の保管にお前のボーイを置いて呉れないかと云ふのですが、向ふは二人もボーイを連れて來てゐるのに私のボーイをなんて勝手なことを云ひ殊に、ボーイ無しでは、カブルへ歸へつても私には食事が出來ないので、私から俺は嫌だ、運轉手が居るから夫れに番をさせて呉れと未だ自動車の預け場所を決まらないうちに、私は私のボーイとアスマイヤル達を残してさつさと歩き出しました。村人も追つて來てお前たちは宿まつて行けとも云つて呉れ

ましたが、夫れも振り切つてボーイと二人で歩いて出發したのでした。私のボーイのアジザマが、其の時自動車の中から鶏の丸煮を一羽持ち出して來て呉れましたから、お晝は雪と鶏とで道端でやりました。鶏の残りをもつて又歩き出しました。この道はシャカバツドと云ふ乗合自動車の宿驛に出る近道で此の前に歩いたことがありましたから、私は知つてゐたのであります。五十糎も積雪の畦道なのですが丁度お祭りで他處へ働きに出て居る人が郷里に歸へつて來るのが多少あるものですから道に人の足跡だけはありません。雪道の人の足跡を傳つて歩くことは相當に疲れるものです。カプールから歸郷する此の人達に途中で會つてカプール街道に乘合が通つてゐるかと思ひましたら、今は運轉してゐないと云ふことでした。之れでは街道へ出た處で仕方がないとは思つたのですが、まあ何とかなるだらうと行くことにしました。四時頃今夜の宿を心配して呉れたのでせう。測量に遣つてゐた人夫が追ひ駈けて來て、又役所の男と自動車の助手とも追ひついて來て、午後五時アンブハー

グ村へ着き、此の前一度宿まつたことのある長老の家に案内して呉れました。其の長老は喜んで迎へて呉れました。私も今夜此處に宿する家を見つけてほんとうに嬉しく思ひました。其の主人が、やあと抱つて來たので私も嬉しきまぎれにその爺さんに抱きつきました。此の國の男同志の挨拶の方法で尤も簡單なのは右手を自分の胸にあて、お辭儀をします。夫れより丁寧なのが、握手目上の人に握手する時は目下の人は兩手で相手の手を頂き、夫れにキツスする様な場合もあります。最も親しい同志はお互に抱合つて頭を交互に動かすのであります。鬚面の大男が道端で抱合つて挨拶してゐるのを之れまで良く見てゐて、之れだけはどうもおかしくて俺には出來ないと思つてゐたのですが、今夜は此處の爺さんと此の挨拶をかわしたのでした。俺もアフガン風に段々なつて來るわいと後でおかしく思ひました。部屋には暖かく火をたいて呉れ、食事を持つて來て呉れてやつと人心地ができました。もう疲れ切つた體を動かすことさへ出來ない程でした。

ガン風に段々なつて来るわいと後でおかしく思ひました。部屋には暖かく火をたいて呉れ、食事を持つて来て呉れて

やつと人心地が出ました。もう疲れ切つた體を動かすことさへ出来ない程でした。

判例瞥見

田口二郎

◎收用土地の坪數の誤差と管轄裁判所

(昭和八年(未)第一七〇一號同十)
一年七月十八日東京控訴院判決

東京府知事が其の起業に係る國道改良工事の爲に必要な土地を收用せんとするに當つて、土地所有者と協議が調はなかつたので東京府收用審査會の裁決を求めたところ、審査會は收用土地二百二十坪四合七勺五才として裁決した。そこで土地所有者は該收用土地を實測して見ると二百三十五坪九合三勺七才の面積を有つてゐるので、之に因り損失補償金額を増額すべきであると主張し、起業者たる東京

府知事は之に對して、收用地の區域、坪數は既に收用審査會の裁決によつて確定して居るものであるから、今に至つて之を民事訴訟手續に於て争ふことは許されないと抗辯した。

此の事案に對する控訴判決中に於て東京控訴院は次の様に謂つてゐる。

「凡ソ收用審査會ニ於テ定メタル收用土地ノ區域其ノモノノ變更ハ通常裁判所ノ權限ニ屬セサルトコロナルモ、若シ其ノ區域ノ實測坪數ト收用審査會カ收用土地ニ對スル損失補償額算定ノ基礎ト爲シタル坪數トノ間ニ誤差アルカ爲メ